

新版

しんぱん

指導要文集

しどうようもんしゅう

第一章

だいいっしょう

信心の基本

しんじん きほん

信・不信

しん ふしん

かんじん

わ こしん

かん

じつぽうかい

み

かんじん

観心とは、我が己心を観じて十法界を見る、これを観心と

い

たと

たにん

ろっこん

み

云うなり。譬えば、他人の六根を見るといえども、いまだ

じめん

ろっこん

み

じぐ

ろっこん

し

みようきよう

む

自面の六根を見ざれば自具の六根を知らず、明鏡に向か

とき

はじ

じぐ

ろっこん

み

うの時、始めて自具の六根を見るがごとし。

006 如来滅後五五百歳始観心本尊抄

によらいのめつこのごひやくさいにはじむかんじんのほんぞんしょう

しん ふしん

信・不信 125ページー6行

かんじん

じぶんじしん

せいめい

おも

う

じこ

せいめい

観心というのは自分自身の生命を思い浮かべて自己の生命にそな

じつぽうかい

じつかい

あき

み

かんじん

わっている十方界（十界）を明らかに見ることが観心というので

たにん

まなこ

みみ

はな

した

み

こころ

ろっこん

み

す。たとえば他人の眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を見ることは

じぶんじしん ろっこん み

ですが、自分自身の六根は見ることで知ることがで

あき かがみ ごほんぞん む

きません。明らかな鏡（御本尊）に向かうときはじめて自分の六根

み

を見ることができるようなものです。

じぶん ろっこん

し

い^ごわゆる^{ほん}五品の初^{しよ}・二^に・三品^{さんぽん}には、仏^{ほとけ}正^{まさ}しく戒^{かい}・定^{じよう}の
に^にほ^うう^{せい}し^し い^{いつ}こ^うう^え い^{いち}ぶ^んん^{かぎ} え^え た^た
二法^{にぽう}を制^{せい}止^しして、一^{いつ}向^{かう}に慧^えの一分^{いちぶん}に限^{かぎ}る。慧^えまた堪^たえざれ
ば、信^{しん}をもつて慧^えに代^かえ、信^{しん}の一^{いち}字^じを詮^{せん}となす。不^ふ信^{しん}は
い^{いつ}せ^んだ^いい^{ほう}ぼ^う い^{いん} し^{しん} え^え い^{いん} み^みよ^うじ^{そく} く^くら^{らい}
一^{いつ}聞^{もん}提^{だい}・謗^{ぼう}法^{ぽう}の因^{いん}、信^{しん}は慧^えの因^{いん}、名^な字^じ即^{じく}の位^いなり。

(012 四信五品抄
ししんごほんしょう)

信^{しん}・不^ふ信^{しん}
266 ページー2 行)

ほとけ　みな　とな　きょうかん　読　はな　散　こう　拈

仏の名を唱え、経巻をよみ、花をちらし、香をひねるま

みな　わ　いちねん　おさ　くどく　ぜんこん　しんじん　と

でも、皆、我が一念に納めたる功德・善根なりと信心を取

るべきなり。

015　一生成仏抄

いっしょうじょうぶつしやう

しん　ふしん
信・不信　317ページー8行

ほとけ　な　なんみようほうれんげきやう　とな　ほうべんぼん　じゆりやうほん　きやうもん

仏の名（南無妙法蓮華經）を唱え、方便品・寿量品の經文

よ　ぶつぜん　こう　じぶん

を読み、仏前にしきみをそなえ、香をつまむことまでも、すべて自分

せいめい　くどく　ぜんこん　しんじん　み

の生命におさまる功德・善根になるという信心を身につけるべきで

す。

もし智慧有^{ち え あ}つて信心有^{しんじん あ}ることなきは、この人^{ひと}は則^{すなわ}ち能^よく
邪見^{じゃけん}を増長^{ぞうちよう}す。

(029 顕謗法抄^{けんぼうしやう})

信^{しん}・不信^{ふしん}
506 ページ 15 行

ゆいがいちにん のういくご

われひちにん

よくご

「唯我一人、能為救護（ただ我一人のみ、能く救護をな

ほとけ

おんちから

うたが

いしんとくにゆう

ほけきよう

おし

す」の仏の御力を疑い、「以信得入」の法華經の教え

なわ

危

けつじようむうぎ

みようほう

とな

たてまつ

の繩をあやぶみて、「決定無有疑」の妙法を唱え奉らざ

ちからおよ

ぼだい

きし のぼ

かた

らんは、力及ばず、菩提の岸に登ること難かるべし。

ふしん

もの

ださいないり

こんげん

不信の者は「墮在泥梨」の根元なり。

じみようほつけもんどうしよう

030 持妙法華問答抄

しん

ふしん

信・不信 514 ページー5 行

う

じんしん

あ

ぶつぽう

受けがたき人身をうけ、値いがたき仏法にあいて、いかで

むな

そうろう

おな

しん

と

か虚しくて候べきぞ。同じく信を取るならば、また

だいしよう こんじつ

なか

しよぶつしゆつせ

ほんい

しゆじようじよぶつ

大小・権実のある中に、諸仏出世の本意、衆生成仏の

じきどう

いちじよう

しん

直道の一乗をこそ信ずべけれ

じみようほつけもんどうしよう

(030 持妙法華問答抄

しん

ふしん

信・不信

514

ページー8行)

う

にんげん

せい

ぶつぽう

受けがたい人間として生をうけ、あいがたい仏法にあいながら、

おな

しんじん

どうしてむなしくしていられますようか。同じように信心をとるなら

だいじようきよう

しようじようきよう

こんきよう

じつきよう

しよぶつ

ば、大乘経、小乗経、権教、実教とあるなかで、諸仏が

よ しゅつげん

もくてき

ひと

そくしんじょうぶつ

世に出現した目的の、あらゆる人びとを即身成仏させていける

いちじよう

ほう

さんだいひほう

なんみようほうれんげきよう

しん

一乗の法（三大秘法の南無妙法蓮華經）をこそ信ずるべきです。

ほけきよう しん
法華經を信ずれども、深く信ぜざる者は、半月の闇夜を照
らすのごとし。深く信ずる者は、満月の闇夜を照らすのご
とし。

032 薬王品得意抄

やくおうほんとかくいしよう

しん ふしん
信・不信
527 ページ 3 行

そ ぶつどう い こんぽん しん もと ごじゅうにい なか
夫れ、仏道に入る根本は信をもつて本とす。五十二位の中
じっしん もと じっしん くらい しんじんはじ
には十信を本とす。十信の位には信心初めなり。たとい
解 しんじん もの どんこん しょうけん もの
さとりなけれども信心あらん者は、鈍根も正見の者な
解 しんじん もの ひぼう せんだい もの
り。たといさとりあれども信心なき者は、誹謗・闡提の者
なり。

033 法華経題目抄（妙の三義の事）
ほけきようだいもくしやう みやう さんぎ こと

しん ふしん
信・不信 532 ページ 12 行

ぶつどう じようぶつ きようがい はい しん こんぽん
およそ仏道（成仏の境界）に入るためには信が根本になりま
ぼさつ ごじゅうにい しゅぎよう くらい じっしん くらい
す。菩薩の五十二位（修行の位）のなかでは十信の位のなかで

しんじん いちばん

りかい

は信心が一番はじめになっています。ですから、たとえ理解はなく

しんじん

もの

どんこん

さいかく

せいしつ

しょうけん

さと

ても信心のある者は、鈍根（才覚のにぶい性質）でも正見（悟

きょうがい

もの

はんたい

りかい

しんじん

りの境界）の者なのです。反対にたとえ理解はあつても、信心の

もの

ほうぼうせんたい

もの

じょうぶつ

ない者は謗法闡提の者で成仏はできないのです。

「信は道の源、功德の母」と云えり。菩薩の五十二位に

しん どう みなもと

くどく はは い

ぼさつ ごじゅうにい

じっしん もと

じっしん くらい

しんじん はじ

は十信を本となし、十信の位には信心を始めとなし、

もろもろ

あくごう

ぼんのう

ふしん

もと

諸の悪業・煩惱は不信を本となす

ねんぶつむけんじごくしやう

051 念仏無間地獄抄

しん ふしん
信・不信 748 ページ 14 行

しん

じやうぶつ

いた

こんげん

くどく

しやう

はは

信は成仏に至る根源であり、功德を生ずる母といわれています

ぼさつ

しゆぎやう

くらい

ごじゅうにい

じっしん

きほん

す。菩薩の修行の位である五十二位においては、十信が基本とな

じっしん

くらい

しんじん

しゆっぱつてん

り、その十信の位では、信心が出发点になっています。もろも

わる

ごう

ぼんのう

ふしん

こんぽん

ろの悪い業や煩惱は不信が根本になっているのです。

譬諭品の十四誹謗も不信をもつて体となせり。
ひゆほん じゅうしひぼう ふしん たい

051 念仏無間地獄抄
ねんぶつむけんじごくしやう

信・不信
しん ふしん
748 ページ 16 行

なむ

ぼんご

きみよう

い

にんぽう

「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法こ

あ

にん

しやくそん

きみよう

たてまつ

ほう

ほけきよう

れ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經

きみよう

たてまつ

に帰命し奉るなり。

おんぎくでん

(095 御義口伝

しん ふしん

信・不信 984 ページ 7 行)

なむ

ことば

ちゆうごく

にほん

きみよう

やく

「南無」とはインドの言葉であり、中国、日本では「帰命」と訳

きみよう

たいしよう

ひと

ほう

ひと

きみよう

されています。帰命する対象には人と法とがあります。人に帰命

もんてい

しやくそんそくにんほんぞん

にちれんだいしようにん

きみよう

するとは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人に帰命するこ

ほう

きみよう

ほうほんぞん

さんだいひほう

とであり、法に帰命するとは法本尊である三大秘宝の

なんみようほうれんげきよう きみよう

南無妙法蓮華經に歸命することです。

ふしん ひと によぜがもん
不信の人は「如是我聞」の「聞」にはあらず。法華經の
ぎようじや によぜ たい き ひと い
行者は、「如是」の体を聞く人と云うべきなり。

095
御義口伝

しん ふしん
信・不信
986
ページー
12
行

「開」とは、信心の異名なり。信心をもつて妙法を唱え

たてまつ

奉らば、やがて開仏知見するなり。

かいぶつちけん

おんぎくでん

(095 御義口伝

信・不信 997 ページ 10 行

われ しゅじょう ごたい ごりん みようほうれんげきよう う い

我ら衆生の五体・五輪、妙法蓮華經と浮かび出でたるあ

ほうとうほん

かがみ なら

しん ぼう う

いだ、宝塔品をもつて鏡と習うなり。信・謗の浮かび

よう よ よ

あん

じふじよう かがみ

様、能く能くこれを案ずべし。自浮自影の鏡とは、

なんみようほうれんげきよう

南無妙法蓮華經これなり

おんぎくでん

(095 御義口伝

信・不信 1010 ページ 7 行)

いちねんさんぜん

しん

いちじ

お

さんぜ

しよぶつ

じようどう

一念三千も

「信」の一字より起こり、

三世の諸仏の成道

しん

いちじ

お

しん

じ

がんぽん

も「信」の一字より起こるなり。

この「信」の字、元品の

むみよう

き

りけん

ゆえ

しん

うたが

無明を切る利剣なり。

その故は、「信」は、「疑いなきを

しん

い

ぎわく

だんぱ

りけん

げ

『信』と曰う」とて、

疑惑を断破する利剣なり。「解」と

ちえ

いみよう

しん

あたい

たから

は、智慧の異名なり。

「信」は価のごとく、「解」は宝の

さんぜ

しよぶつ

ちえ

替

しん

いちじ

ごとし。三世の諸仏の智慧をかうは「信」の一字なり。

ちえ

なんみようほうれんげきよう

しん

ちえ

いん

智慧とは南無妙法蓮華経なり。「信」は智慧の因にして

みようじそく

しん

ほか

げ

な

げ

ほか

しん

名字即なり。

「信」の外に「解」無く、「解」の外に「信」

な

しん

いちじ

みようかく

しゆし

さだ

無し。「信」の一字をもつて妙覚の種子と定めたり。

（095 御義口伝

信・不信 1011 ページ 16 行

いちねんさんぜん ほうり
一念三千の法理といつても、信の一字より起こり成り立っている
さんぜ ほとけ
です。また三世のあらゆる仏も、みな御本尊を信じて成仏した
しん がんぽん むみよう じょうぶつ
のです。この信というのは、元品の無明（成仏をさまたげる根本
まよ た き りけん りゆう しん うたが な しん
の迷い）を断ち切る利剣です。その理由は信とは「疑い無きを信と
い ぶつぼう たい うたが まど た やぶ
曰う」ということで、仏法に対する疑いや惑いを断ち破っていく
りけん げ りかい ちえ べつめい しん
利剣なのです。解（理解すること）とは智慧の別名です。信ずること
だいか げ たから さんぜ
は代価のようなもので解とは宝のようなものです。三世のあらゆる

ほとけ ちえ え しん いちじ

仏の智慧を得るのは信の一字によるのです。智慧とは

ちえ

なんみようほうれんげきよう

ごほんぞん しん

ほとけ ちえ

南無妙法蓮華經のことです。御本尊を信ずることは、仏の智慧を

みようじそく くらい

しん

げ え

いただくもとであり、名字即の位なのです。信なくして解は得られ

げ なんみようほうれんげきよう

しんじつ しん

しん

ず、解（南無妙法蓮華經）なくして真実の信もありえません。信の

いちじ みようがく ほとけ

たね

一字こそ、妙覚（仏のさとり）で種であるのです。

ほんぽう　じゅじ

この本法を受持するは、信の一字なり。

しん　いちじ

元品の無明を対治

がんぽん　むみよう

たいじ

りけん　しん　いちじ

する利剣は、信の一字なり。「疑いなきを信と曰う」の

しやく　おも

釈、これを思うべし

095　御義口伝

おんぎくでん

信・不信
1047 ページ 10 行

しん　ふしん

1047

しゅぎよう

修行とは、

むぎわっしん

「無疑曰信

うたが

（疑いなきを信と曰う）」

しん

い

の信心の

しんじん

ことなり。

095

（御義口伝

おんぎくでん

信しん

・不信ふしん

1059

ページー2行

「信」の一字は、最後品の無明を切る利剣なり。

095
御義口伝

信・不信
1060
ページー
7
行

「信」^{しん}とは、「無疑曰信（疑^{むぎ}いなきを信^{うたが}と曰^う）」明^{しん}了^い
なり。「伏」^{ぶく}とは、法華に帰伏するなり。「随」^{ずい}とは、心^{こころ}
を法華經に移すなり。「從」^{じゅう}とは、身^みをこの經に移すな
り。

（095 御義口伝^{おんぎくでん}）

信^{しん}・不信^{ふしん}
1066 ページ 12 行

ふしん こころしゆつたい

不信の意出来せば、たちまちに信心に住すべし。詮ず

しんじん じゆう

せん

ふしん こころ

るところ、不信の心をば師となすべからず。信心の心を

ししやう

師匠とすべし。

おんこうききがき

(096 御講聞書

信・不信
1174
ページー
14行

しょうじ　じょうや　て　だいとう　がんぽん　むみよう　き　りけん
生死の長夜を照らす大燈、元品の無明を切る利劍は、この
ほうもん　す
法門に過ぎざるか。

（145　しよきよう　ほけきよう　なんい　こと
諸経と法華経と難易の事）

しん　ふしん
信・不信　1345　ページー6行

しょうじちようや　やみ　て　だいとうみよう　がんぽん　むみよう
生死長夜の闇を照らす大燈明であり、われわれの元品の無明
た　き　だいいりけん　ほうもん　さんだいひほう　なんみようほうれんげきよう
を断ち切る大利劍は、この法門（三大秘宝の南無妙法蓮華経）のほ
かにはありません。

しん みようかく

信ぜば、妙覚の仏にもなりぬべし。いかにしてか、

こんど ほけきよう しんじん 取 きよう ぎよう

今度、法華經に信心をとるべき。信なくしてこの經を行

て

ほうざん い

あし

せんり みち

ぜんは、手なくして宝山に入り、足なくして千里の道を

くわだ

企つるがごとし。

ほうれんしょう

164 法蓮抄

しん ふしん

信・不信 1418 ページ 12 行

ほけきよう ぎようじゃ

じごく

くどくふくうん え

（法華經の行者をそしれば地獄におち、たたえれば功德福運を得

ほうもん

しん

みようかく

ぼさつ

ほとけ

さと

え

くらい

るとの法門を）信ずれば妙覚（菩薩が仏の悟りを得た位）の

ほとけ

こんど

ほけきよう

しんじん

仏になることができます。どのようにして、今度、法華經に信心を

しんじん

ほけきよう

しゆぎよう

て

つかむべきでしようか。信心がなくて法華經を修行することは、手

ひと

たから

やま

はい

あし

ひと

せんり

みち

ある

かんが

のない人が宝の山に入り、足のない人が千里の道を歩こうと考

えるようなものです。

しんじん

まつた

びようどうだいえ

ちすいかわ

信心のこころ全ければ、平等大慧の智水乾くことなし。

あきもとごしよ

170 秋元御書

しん ふしん

信・不信 1458 ページ 13 行

かんぜん うつわ みず

しんじん ころざし かんぜん ただ

(完全な器が水をもらさないように) 信心の志が完全で正

ひと

びようどう くどく あた

ほとけ ちえ みず

しければ、人びとに平等に功德を与えていく仏の智慧の水はかわ

くことはありません。

こころ し

「心の師とはなるとも、心を師とせざれ」とは

ろくはらみつきよう もん

六波羅蜜經の文なり。

きようだいしろう

(171 兄弟抄

こころ し

「心の師となることはあつても、自分の心を師としてはいけない

じぶん こころ し

信・不信 1481 ページ 3 行

よわ みにく こころ

こうどう

(弱く醜い心のままに行動してはいけない)とは、六波羅蜜經

もん

の文です。

ろくはらみつきよう

ごしんじん

剣

進

ひと

ただし御信心によるべし。つるぎなんども、すすまざる人

もち

ほけきよう

つるぎ

しんじん

のためには用いることなし。法華經の剣は、信心の

健 氣

ひと

もち

おに

金

棒

けなげなる人こそ用いることなれ。鬼にかなぼうたるべ

し。

(225 經王殿御返事

きようおうどのごへんじ

しん ふしん

信・不信 1633 ページー5 行)

しよてんぜんじん

しゆご

しんじん

つよ

よわ

つるぎ

ただし(諸天善神の守護も)信心の強さ弱さによります。剣な

てき

すす

おくびよう

ひと

なん

やく

た

ども、敵にむかつて進まない臆病な人には何の役にも立ちませ

ほけきよう

ごほんぞん

つるぎ

しんじん

つよ

ゆうき

ひと

ん。法華經(御本尊)という剣は、信心の強い勇氣ある人であつて

こそ役に立つのです。これこそ鬼に鉄棒なのです。

やく た

おに かなぼう

そ しんじん もう べつ そうろう め 夫 惜
夫れ、信心と申すは別にはこれなく候。妻のおところをお

しむがごとく、おとこの妻に命をすつるがごとく、親の
こ 捨 こ はは 離

子をすてざるがごとく、子の母にはなれざるがごとくに、

ほけきよう しゃか たほう じつぼう もろもろ ぶつぼさつ しょうぜんじんとう

法華経、釈迦・多宝、十方の諸の仏菩薩、諸天善神等に

しん い たつまつ なんみようほうれんげきよう とな

信を入れ奉つて、南無妙法蓮華経と唱えたてまつるを、

しんじん もう そうろう

信心とは申し候なり。

（245 妙一尼御前御返事
みよういちあまごぜんごへんじ

しん ふしん
信・不信 1697 ページー6 行

しんじん とくべつ

およそ信心というのは、特別にこれといったものではありません

つま おっと

おも

おっと つま

いのち す

ん。妻が夫をいとおしく思うように、夫が妻のためには命を捨

おや こす

こども ははおや はな

てるように、親が子を捨てないように、子供が母親から離れないよ

ほけきよう しゃか たほう じつぼう しょぶつ ぼさつ しょてんぜんじん しん

うに、法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏・菩薩・諸天善神を信じ

なんみようほうれんげきよう とな

しんじん

て、南無妙法蓮華経と唱えていくことを信心というのです。

この度、大願を立てて、後生を願わせ給え。少しも謗法

ふしん

失 そちら

むけんだいじよううたが

たと

不信のところが候わば、無間大城疑いなるべし。譬え

かいじよう

ふね

乗

ふね

疎

ば、海上を船にのるに、船おろそかにあらざれども、

滄 い

かなら

せんちゆう

ひとびといちじ

し

あか入りぬれば、必ず船中の人々一時に死するなり。

睨

けんご

あり

あな

かなら

つい

たた

なわて堅固なれども、蟻の穴あれば、必ず終に湛えた

みず

溜

ほうぼうふしん

滄

取

しんじん

る水のたまらざるがごとし。

睨

固

謗法不信のあかをと、信心

のなわてをかたむべきなり。

(262 阿仏房尼御前御返事

あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

だいがん

た

ごしょう

ねが

すこ

ほうぼう

このたび、大願を立てて後生を願っていきなさい。少しでも謗法

ふしん とが

むけんだいじょう

むけんじごく

おな

お

や不信の失があるならば、無間大城（無間地獄と同じ）に堕ちるこ

うたが

うみ

うえ

ふね

の

ふね

とは疑いないでしょう。たとえば海の上を船に乗っていくのに、船

そまつ

みず

はい

ふね

しず

せんちゅう

は粗末でなくても、水が入ったならばかならず船は沈み、船中の

ひと

し

なわて

た

人びとはみんないっしよに死んでしまいます。また、罾（田のあ

けんご

あり

あな

さいご

みず

ぜ）は堅固であつても蟻の穴があればかならず最後にはたたえた水が

もれてたまらないようなものです。したがって、船に入る謗法不信

みず

と

のぞ

しんじん

なわて

かた

ふね

はい

ほうぼうふしん

の水を取り除き、信心の罾を固めるべきです。

信心しんじんの血脈けつみやくなくんば、法華經ほけきようを持つとも無益むやくなり。

（276 生死しやうじ一大事血脈抄いちだいじけつみやくしやう）

信しん・不信ふしん 1777 ページ 2 行

総じての信心しんじんの血脈けつみやくが通とおっていなければ法華經ほけきよう（御本尊ごほんぞん）を持たも

つていたとしても、少しも功德くどくはありません。

いちえんぶだいいいち

ごほんぞん

しん

たま

相

構

一閻浮提第一の御本尊を信じさせ給え。あいかまえて、あ

しんじん

強

そうら

さんぶつ

しゅご

被

いかまえて、信心つよく候いて、三仏の守護をこうむら

たも

せ給うべし。

(280

諸法実相抄

しよほうじつそうしやう

信しん

・不信ふしん

1793

ページー1行)

飢 じき 願 がん かつ かつ 水 みづ 慕 ぼ こ

かつえて食をねがい、 渴して水をしたうがごとく、 恋いて

ひと ひと み み やまい やまい 薬 くすり 頼 たよ

人を見たきがごとく、 病にくすりをたのむがごとく、

見 み 目 め 形 かたち ひと ひと 紅 こう 白 はく 物 もの 付 つ

みめかたちよき人、 べに・しろいものをつくるがごとく、

ほけきよう ほけきよう しんじん しんじん 到 たう たま たま こうかい こうかい

法華経には信心をいたさせ給え。 さなくしては後悔あるべ

し

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

うえのどのごへんじ うえのどのごへんじ どうじようなん どうじようなん こと こと

しん しん ふしん ふしん 信・不信 しん・ふしん 1892 ページ 6 行

う う た た もの もの もと もと か か わ わ み み ず ず

飢えたときに食べ物を求め、 のどが渴いたときに水をほしがるよ

こい こい ひと ひと おも おも び び ょう ょう き き く く す す り り た た よ よ

うに、 恋しい人にあいたいと思うように、 病気になって薬を頼り

ひと べにしろこ

おな

にするように、きれいな人が紅や白粉をつけるのと同じように、

ほけきよう ごほんぞん

しんじん

こうかい

法華経（御本尊）に信心をしていきなさい。そうでないと後悔する

ことになります。

たと

しょうに

ひ

はな

こころ

もの

や

譬えば、小児の火を放つに、心にあらざれども、物を焼

ほけきよう

ぞんがい

しん

な

くがごとし。法華経もまたかくのごとし。存外に信を成せ

かなら

ほとけ

成

ば、必ず仏になる。

335 上野尼御前御返事（烏竜遺竜の事）

うえののあまごぜんごへんじ

おりよういりよう

こと

しん

ふしん

信・不信 1915 ページ 15 行

そ ゆきいた しろ 染 染 うるしいた
夫れ、雪至つて白ければ、そむるにそめられず。漆至

黒 白 移
つてくろければ、しろくなることなし。これよりうつりや

ひと こころ ぜんあく そうろう しんごん ぜん
すきは人の心なり。善惡にそめられ候。真言・禪・

ねんぶつ しゅうとう じゃあく もの かなら じごく 墮
念仏宗等の邪惡の者にそめられぬれば、必ず地獄にお

ほけきよう たてまつ かなら ほとけ 成 きよう
つ。法華經にそめられ奉れば、必ず仏になる。經に

い しよほうじつそう うんぬん ひとしん
云わく「諸法実相」云々。また云わく「もし人信ぜずして

ないしあびごく い うんぬん
乃至阿鼻獄に入らん」云々。

ごしんじん ゆき うるし おん持
いかにも御信心をば雪・漆のごとくに御もちあるべく

そうろう
候。

にしやまどのごへんじ ゆきうるしごしよ
355 西山殿御返事 (雪漆御書)

しん ふしん
信・不信 1951 ページ 11 行

ゆき しろ ほか いろ そ
およそ雪はきわめて白いですから他の色で染めようとしても染め

うるし ひじょう しろ
ることはできません。漆は非常に黒いものですから白くなることは

ちが うつ ひと こころ ぜん
ありません。それとは違って移りやすいのは人に心です。善にも

あく そ しんごん ぜん ねんぶつしゅう わる もの
悪にも染められます。真言や禅、念仏宗などのよこしまで悪い者

こころ そ じごく お はんたい
たちに、心を染められれば、かならず地獄に堕ちます。反対に

ほけきよう えん しんじん はげ じょうぶつ
法華経に縁して信心に励めばかならず成仏するのです。

ちゅうりやく しんじん しろ ゆき しろ うるし なに
(中略) どうか信心だけは白い雪、黒い漆のように何ものにも

そ
染められないように持つていくべきです。
たも

根深

葉枯

泉

たま

みず絶

「ねふかければはかれず、いずみに玉あれば水たえず」と

もう

ごしんじん

根

潔

たま

こころ

申すように、御信心のねのふかく、いさぎよき玉の心の

内

たも

うちにわたらせ給うか。

くぼのあまごぜんごへんじ

しんじん

ねふか

こと

366 窪尼御前御返事（信心の根深き事）

しん ふしん

信・不信

1973

ページー14行

しんじんよわ

じようぶつ

延

とき

それがし

恨

たも

信心弱くして成仏ののびん時、 某をうらみさせ給う

たと

びようじゃ

ろうやく

あた

どく

この

食

な。譬えば、病者に良薬を与うるに、毒を好んでくいぬ

やまい

とき

わ

失

おも

かえ

れば、その病愈えがたき時、我がとがとは思わず、還つ

くすし

うら

て医師を恨むるがごとくなるべし。

にいけごしよ

(400 新池御書

信・不信

2067

ページー14行)

この経の信心と申すは、少しも私なく、経文のごとく
に、人の言を用いず、法華一部に背くことなければ、仏
に成り候ぞ。

(400 新池御書

信・不信
2067 ページ 17 行

うげむしん

ほうもん

さと

しんじん無

もの

有解無信とて、法門をば解つて信心なき者は、さらに

じようぶつ

うしんむげ

げ無

しんじん有

成仏すべからず。有信無解とて、解はなくとも信心ある

じようぶつ

みな

きよう

こころ

わたくし

ことば

ものは、成仏すべし。皆この経の意なり。私の言に

にまき

しん

い

え

はあらず。されば、二の巻には「信をもつて入ることを得

おのちぶん

ちえだいいち

しやりほつ

たり。己が智分にあらず」とて、智慧第一の舍利弗も、た

きよう

う

たも

しんじんごうじよう

ほとけ

成

おの

だこの経を受け持ち信心強盛にして仏になれり、己が

ちえ

ほとけ

と

たま

しやりほつ

ちえ

智慧にて仏にならずと説き給えり。舍利弗だにも智慧に

ほとけ

われ

しゆじよう

しようぶん

ほうもん

ては仏にならず。いわんや、我ら衆生、少分の法門を

こころえ

しんじん

ほとけ

覺

束

心得たりとも、信心なくば仏にならんことおぼつかな

し。

（
400 新池御書

しん ふしん
信・不信 2068 ページー10 行

うげむしん

ぶつぼう りかい

しんじん

ひと

有解無信といって、たとえ仏法を理解していても、信心のない人

じょうぶつ

はんたい

うしんむげ

はけつして成仏することはできません。反対に、有信無解といっ

ぶつぼう

ほうり りかい

しんじん

ひと

じょうぶつ

て、仏法の法理を理解できていなくても信心がある人は成仏する

ちゅうりやく

ちえだいいち

しやりほつ

じぶん

ことができるのです。（中略）（智慧第一の舍利弗でさえ、自分の

ちえ

じょうぶつ

わたし

ぼんぷ

すこ

智慧では成仏できなかったのですから）まして、私たち凡夫が少

ぶつぼう

どうり

しんじん

じょうぶつ

しぐらい仏法の道理をわかったとしても、信心がなければ成仏す

ることはおぼつかないのです。

ごほんぞん

しんじん

にじ

納

しん

この御本尊もただ信心の二字におさまれり。「信をもつて

い

え

にちれん

でしだんなとう

入ることを得たり」とは、これなり。日蓮が弟子檀那等、

しょうじき

ほうべん

す

よきよう

いちげ

う

むに

「正直に方便を捨つ」「余経の一偈をも受けず」と無二

しん

ゆえ

ごほんぞん

ほうとう

なか

い

に信ずる故によつて、この御本尊の宝塔の中へ入るべきな

ごしょう

嗜

たも

り。たのもし、たのもし。いかにも後生をたしなみ給うべ

たも

なんみようほうれんげきよう

し、たしなみ給うべし。あなかしこ。南無妙法蓮華経とば

とな

ほとけ

成

たいせつ

しんじん

かり唱えて仏になるべきこと、もつとも大切なり。信心

こうはく

の厚薄によるべきなり。

ぶつぼう

こんぼん

しん

みなもと

仏法の根本は信をもつて源とす。

405 日女御前御返事（御本尊相貌抄）

しん ふしん
信・不信 2088 ページー5 行

ごほんぞん

しんじん にじ おき

しん も

この御本尊も、ただ信心の二字に収まっているのです。「信を以つ

はい え

にちれん でし だんな

て入ることを得たり」というのは、このことです。日蓮の弟子や檀那

しょうじき ほうべん おし す

きょうもん よきよう ほけきよう

たちは「正直に方便の教えを捨てて」の経文や「余経（法華経

いがい きよう いちげ う も

きょうもん

以外のあらゆる経）の一偈をも受け持つてはいけない」の経文の

ほけきよう ごほんぞん ゆいつむに しん ごんぎよう しょうだい

とおり、法華経（御本尊）のみを唯一無二に信じ、勤行・唱題し

ごほんぞん ほうとう なか はい

ていくことによつて、この御本尊の宝塔の中に入ることができると

ちゅうりやく なんみようほうれんげきよう とな じょうぶつ

です。（中略）「南無妙法蓮華経」とだけ唱えて、成仏していく

たいせつ

しんじん

こうはく

きょうじやく

ことがもつとも大切です。それはひとえに信心の厚薄（強弱）

ぶつぽう

こんぽん

しん

みなもと

によるのです。仏法の根本は、信をもつて源とするのです。

くるま もう

ほんじやくにもん わ

そもそも、この車と申すは、本迹二門の輪を

みようほうれんげきよう

うし

懸

さんがい

かたく

しやうじしやうじ

妙法蓮華經の牛にかけ、三界の火宅を生死生死とぐるり

回

そうろう

くるま

しんじん

轄

ぐるりとまわり候ところの車なり。ただ信心のくさび

こころざし

油

差

たま

りようぜんじようど

詣

たも

に志のあぶらをささせ給いて、靈山浄土へまいり給う

べし。

(431 大白牛車書

だいびやくこしやしよ

信・不信 2151 ページ 13 行
しん ふしん